
大好きなキミへ.....

椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きなキミへ……

【Nコード】

N3834E

【作者名】

椿

【あらすじ】

「恋はすべてが叶う訳じゃない……」主人公亜美のちよつとセツナイ？失恋ストーリーです。

(前書き)

した。

優しくて、

大好きで

ミが

楽しい

キ

椿の実話です…

恋って、本当に気付かないものなんだね。

早く、自分の気持ちに

素直になれば良かった。。。

あたしの名前は

沖野 オキノ 亜美 アミ

中学3年生

最近、失恋しました。

半年の間、ずっと気になっていた人でした。

でも、“好き”という気持ちに気付かないまま、
彼女が出来てしまいました。

彼女が出来て

初めて気付いた恋でした。。。

“失恋”かあ…

この痛みって、

本人にしか分からないものだね。

あたしは、

気持ちを伝えることが

出来なかった。

だから、

彼女が出来たとしても

どうしようもない。。。

でもね、

やっぱり悔しいの。

あの子の優しさは、

あたしだけが

知ってると思ったのに。

勘違いだね。

失恋して気付いた恋は、

どうすればいい？

もっと早く

素直になりたかったよ。

そしたら…

もしかしたら…

一緒にいれたかもしれない。

でも、もう遅い。

気付くのが、遅すぎた。

《《好きな人の幸せを、
ずっと願っていたい》》

そんなこと…

今は無理だよ。。。

出来れば、

願っていたいよ。

大好きなキミの

幸せを…。

でも、今のあたしは

出来ない。。。。

あたしには、

何ができるのかな…。

無力だ。

「亜美??大丈夫??」

「…優羽ちゃん…。」

佐伯 優羽「サエキ ユウ」

あたしの気持ちを知る、ただ1人の幼なじみ。

『香緒里い ラブラブだね 昨日一緒に、帰ったんでしょ?』

『えー!!見てたの??ひどおい／＼』

『てかさー!!どこまでいったあ???』

『ちよっ／＼やめてよー』

…聞こえる。

彼女の声が。

あたしのすべてを狂わす。
平常心でいるというのは、
今のあたしには

難しいな…。

「…亜美。」

「あはつ。優羽ちゃん…。失恋みたいだあ…。本当に…。」

「亜美、もう分かったから…」

「彼女出来ちゃったね…！」

「亜美！無理しないでいいよ！」

「無理なんかしてないよ！」

「だって亜美っ！…！」

「本当につ…大丈夫だから！大丈夫と思わせてよ…。無理してるなんて、思ったら…悲しくなるから…。」

「ごめんね、亜美。」

「ううん！」

「ごめんね、八つ当たり…しちゃって。」

「あ、あたし先生に呼び出されてるんだっ…！ごめんね…！」

「うん、分かった…。」

「待ってるね。」

「精一杯の笑顔だった。」

「静かな放課後。」

「誰もいない教室…。」

「寂しい…。」

「あたしは自分の席から立ち上がった。」

そして、窓からグラウンドでも眺めていようと、窓に向かった。

とにかく…

気持ちを落ち着かせたかった。

それだけだった。

グラウンドには、男子テニス部がいた。

うちの学校のテニス部は厳しくて、

毎日が筋トレのようなものらしい。

今日は、グラウンドを走っている。

あれ…？制服の人…。

ああ…そうか。

もうすぐ卒業式だから、
挨拶でもしてるんだ。

よく見ると、

勇くんがいた。

あたしの片思いだった人。
失恋した相手。

そういえば、テニス部だったんだっけ。。。

不真面目なキミが、テニス部かぁ。

最初はびっくりしたよ。

でもね、いつも笑顔でプレーしてる姿を見た時、

すごいかっこよかったんだ。

やっぱり…

あきらめられないんだなぁ。

そう思うと、

涙が出てきた。

大好きだったの。

いつも元気なキミが。

大好きでした。

いろんな思い出が

よみがえってくる。。。。

席が近くなったとき、

学校いくのが楽しかった。

授業中静かに出来なくて、

よく先生に怒られてたよね。

何でもないようなことが

とつてもとつても

楽しかった…。

1人しかいない

寂しい教室で…。

あたしは

思いつ切り泣いた。

今までの気持ちを

吐き出すように。

好きと言えなかった

後悔の気持ちを

全部消すように…。

彼女が出来て、

初めて気付いた…。

恋でした。

「…み…」

誰かの声…

「…あみ…!!」

誰？

「ちょっと！亜美…!!」

「…へ？」

「もう！待っててくれたと思ったら、寝てるんだもん。」

「え…寝てた？」

「うん。メールしても、返ってこないしさー」

「うそっ！」

時計を見ると、

もう6時になりそうだった。

「亜美、ちょっとは落ち着いた？」

「え…？」

「泣いたんでしょ？」

「…!!どうして分かるの？」

「亜美だからね！」

「えー何い！？なんでー??」

「内緒」

「優羽ちゃん！」

優羽ちゃんがいたから、

あたしの心は

すっきりしたのかも。

「優羽ちゃん、ありがとう。」

「え？何て言った？」

「内緒」

「亜美い??言えーっ！」

「キヤー！」

「言わないと、またつねるよ!?!?」

「嫌あー!内緒だもん!」

「亜美ー!?!」

…キミが最後に

教えてくれたのは、

支えてくれる友達の

存在でした。。。

時は流れて…
卒業式…。

「しろいひかりのなーかにー!…」

もう、卒業かあ。

早かったなあ。

式も終わり、

教室に戻った。

「卒業しても、忘れないでねっ…!!」

「亜美…。あたしたち、同じ学校じゃん…」

「そうなんだけどー!!」

「ハイハイ」

「優羽ちゃん。言っでいい？」

「え？」

「ユウ、大好きだよ。」

「亜美。今のどっち？」

「え？何がぁ？」

「だからさー。」

「しーらない」

「亜美いー!!」

とても大好きなキミでした。

でも、とても悲しい恋でした。

「優羽ちゃん。」

「何？」

「次はさあー。叶う恋がしたいね。」

「そうだね」

「高校行ったら、かっこいい人いるかな？」

「さあ？どうだろね。」

「あ。桜のつぼみ…」

グラウンドの桜は、

まだ咲いていなかった。

桜が咲く前に、

散ったあたしの恋でした。

大好きなキミへ

キミの笑顔が大好きでした。

キミの笑顔が

あたしのすべてでした。

桜が咲く前に

散ったあたしの恋でした。

いつかまた…

会えるかな…？

最後の教室で、

いつ会えるか分からない、
最後のキミの

後ろ姿に言った。

もちろん…

心の中で。

ばいばい…。

いつも元気で

いってねえ。

あれから3カ月が

経とうとしている。

卒業式以来、

あたしは勇くんに

会ってない。

学校の方向が

反対だから、

電車も合わないし。

「もう…会えないかも」

そんなことを

思っていた。

噂で聞いた。

あの2人が

別れたって…。

今さら聞いたって…

どうすればいい？

もう思い出に

なってきたのに…。

勇と香緒里は、

別れてしまいました。

心の中に、

2人はいる。

大切な思い出を

ありがとう…。

あたしは

忘れないよ。

これからも

ずっとずっとね!!!

「亜美ー？次、体育なんだけど！」

「あ、ゴメン!!！」

あたしは急いで

友達のところへ戻った。

恋をしていた、勇くん。

大好きな、優羽ちゃん。

2人とも、

別々の学校。

優羽ちゃんは

携帯を止められて

いるまま、

現在に至る。

だから、

音信不通。

でも、

あたしは優羽ちゃんを

忘れない。

優羽ちゃんが

忘れてるとしても、

ずっとずっと

忘れないから…。

次は

叶えてみせるよ…

(後書き)

あとがき

こんな下手な小説を、

読んで下さっ

て

ありがとうございます。

読んで下さった皆さんに…

後悔しない恋を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3834e/>

大好きなキミへ.....

2010年12月22日14時35分発行